

2018年度 第3四半期決算説明会 主な質疑応答

日時 : 2019年2月1日(金) 10:00~11:00

全体

Q: 発電と電子デバイスの業績予想を下方修正したが、下方修正の事由と認識したタイミングは。

A:

- ・発電は、大口案件のコストアップを3Qで把握したもので下方修正した。
主要機器などの手配やコストは計画通りに進んでいたが、配管・弁など想定外に購入物量が増加し、加えて工事費も増加することが3Q決算で判明したため損失計上した。コストを精査の上で費用計上したので、これ以上の追加費用の発生はないと判断している。
- ・電子デバイスは、3Q以降の市況と業績を踏まえ2019年1月に下方修正を決定した。

Q: マクロの市況環境はいつ頃から上向いてくると考えているか。

A:

- ・来期以降の見通しは米中貿易摩擦、イギリスのEU離脱等の影響もあり予測が難しい。事業ごとに市況影響は異なるものの、2019年度上期末頃には上向いてほしいと考えている。

Q: 2019年度以降期待ができる事業は。

A:

- ・2019年度計画は取り纏め中だが、成長ドライバーの中心はパワーエレクトロニクスとパワー半導体。パワーエレクトロニクスは、工場電気設備丸ごとソリューション、システム案件の受注拡大を図っていく。

パワーエレクトロニクス

Q: 低圧インバータの受注は。

A:

- ・国内3Q累計は堅調に推移し、4Qも堅調に推移するとみている。
3Qは対前年で約10数%の減少。4Qは3Qと同レベルで推移するとみている。

Q: パワーエレクトロニクスの事業環境について、主要事業別の見通しは。

A:

- ・エネルギーマネジメントは、アジアでシステム案件の需要が増加し、大幅な受注増加の見通し。施設・電源システムは、国内工作機械メーカーや半導体メーカーの設備投資の状況を見極めたいが、延伸傾向にあるとみている。器具は工作機械メーカー向けが減少しているが、受配電盤メーカー向けは国内で堅調が続くとみている。
- ・低圧インバータ、サーボは、中国での減少が2019年度上期まで続くが、一方で低圧インバータはアメリカ、台湾で増加する見通し。FAシステムは船舶用スクラバの受注が順調に推移している。

Q：パワエレシステムのコンポーネントの通期見通しは。

A：

- ・パワエレシステムの3製品で見ると、低圧インバータは、対前年で増収増益の見通し。上期まで自動化需要が好調だったサーボは、下期から中国向けが減少しており、FA コンポーネント全体は、対前年で減収減益の見通し。回転機は、ほぼ国内向けだが、受注が増加し対前年で増収増益の見通し。

Q：船舶用スクラバの受注見通しは。

A：

- ・2018年度末の受注残が50セットを超える見通し。

Q：船舶用スクラバの製品ラインナップや生産体制、受注状況についてアップデートはあるか。

A：

- ・現状で16MWクラスの船舶までカバーするスクラバを製品化しているが、24MWクラスの大型船に対応する製品の開発を進めている。2019年度上期に上市したいと考えており、生産体制も現状の千葉工場だけでなく、他工場での生産も検討中。生産能力は今期中に月産6台を目指しており、売上高年間100億円以上を目指し、千葉工場の設備投資も進めて行く。受注状況としてはこれまで新造船中心に受注していたが足元で既存船も受注できた。

電子デバイス

Q：電子デバイスの3Q実績及び通期見通しについて、半導体、ディスク媒体の内訳は。

A：

- ・売上高は、3Qが半導体で257億円、ディスク媒体で64億円。通期は半導体で約1,100億円、ディスク媒体で約240億円の見通し。
- ・営業利益の内訳は非開示。

Q：電子デバイスの通期営業利益の下方修正のサブセグメント別内訳は。

また、下方修正後もディスク媒体事業の営業利益は黒字を維持しているのか。

A：

- ・営業利益9億円の悪化のうち、半導体とディスク媒体の割合は半々程度。
- ・ディスク媒体は、黒字を維持している。

Q：電子デバイスが、3Qから4Qにかけて減収増益となっているが、その理由は。

A：

- ・売上は、4Qの為替レートを105円としているため、為替が影響し、減収となっている。営業利益は機種構成差が好転することで、若干の増益となる。パワー半導体において、産業分野向けの中での機種構成の変化もあるが、自動車分野向けパワー半導体が増加することも要因。

Q：電子デバイスの営業利益について対前年 3Q 減益、4Q 増益の理由は。また、資本費は当初計画から変化あるか。

A：

- ・3Q の減益は為替影響によるものが大きいですが、対前年で研究開発費、資本費も増加している。4Q は、機種構成差により若干増益となる。
- ・資本費は、当初計画から変わっておらず、対前年で増加する見通し。

Q：パワー半導体の 3Q 実績及び 4Q 見通しの受注は。

A：

- ・為替影響を含め、3Q は対前年で 10% 台の減。産業分野を中心とした減少であり、産業モジュールの減少が大きく、産業ディスクリートは若干の減少となった。自動車は前年並。
- ・なお、前年度 3Q は先行受注があり、先行受注と為替影響を除くと、1 桁台の減に留まる。
- ・4Q は 3Q に対して横ばいの見通し。

Q：パワー半導体の今後の受注見通しは。

A：

- ・現在が需要の底であるかは不透明だが、産業分野向けは 2019 年度 1Q までは横ばいが続くともっている。自動車分野向けは 4Q から来期にかけて増加する見通し。

Q：パワー半導体の稼働状況と在庫状況は。

A：

- ・稼働状況について、前工程は 8 インチを中心に 90% 以上フル稼働しているが、後工程は産業分野向けの若干の減少により 8 割台で稼働している。在庫は正常レベルであり、過剰感はない。

Q：パワー半導体の受注が弱い背景は、顧客や代理店の在庫調整でなく、最終需要が弱いことに起因しているという理解で良いか。

A：

- ・需要減によるもの。

Q：パワー半導体の増産投資の前倒しの背景は。また、増産投資分のアウトプットはいつ頃か。

A：

- ・自動車向けの需要が計画より増加傾向にあり、追加で 250 億円の設備投資の前倒しを決定した。これまで発言してきた 2023 年度までの設備投資額の内数である。2019 年後半～2020 年にかけて実行する計画。
- ・増産投資の前倒し分は、2019 年下期から業績に若干出始め、完成は 2020 年下期の予定。

Q：自動車向けパワー半導体が好調な背景は。競合のシェアを奪えているのか。

A：

- ・当社だけが好調というわけではなく、業界全体が好調だ。そうした中で機器の小型化に貢献する RC-IGBT を自動車向けに適用できているのは当社のみであり、他社と差別化できている。

Q：RC-IGBTの技術的な優位性はどのくらい続くか。

A：

- ・自動車向けパワー半導体はスペックインに5～6年かかるため、それくらいは維持できるのではないかと。

Q：自動車向けパワー半導体において、SiCよりIGBTの需要が増加している背景は。

A：

- ・SiCに比べIGBTの需要が増加している背景は、足元でSiCの価格が高いことにある。そのため、環境規制や燃費規制などに対しては、IGBTで進めざるを得ない状況にある。ただし、IGBTの素材であるシリコンの性能には限界があり、1万ボルトなどの高圧にはSiCが必要となる。自動車や一般産業向けは、鉄道を除くと1,200～1,500ボルトの領域であり、シリコンで十分とみている。

Q：ディスク媒体において、データセンターなどの市況低迷を受けて、増産計画の見通しに変化はあるか。

A：

- ・足元ではデータセンター向けの需要は減少しており、2Qに増産投資を計画していたが、需要低迷分についての補正はしている。

Q：ディスク媒体の需要は3Qまで堅調に来ており、4Qから急速に悪化しているという理解で良いか。また、一時的な減少であり、中期的には需要が伸びていくという認識で良いか。

A：

- ・3Qの途中から対計画で下振れ始めている。4Qは計画を大きく下回る見通し。
- ・ディスク媒体の需要は、長期的には増加するとみている。

Q：ディスク媒体の3Qの売上におけるアルミ・ガラスの内訳は。

A：

- ・3Qの売上枚数の比率はアルミ・ガラス半々程度。

食品流通

Q：店舗流通について、3Qまでは例年に比べてあまり良くない一方で、4Qで営業利益を上げている要因は。

A：

- ・店舗流通の新商材が出始め、4Qは売上・営業利益とも増加する見通し。

以上